

兵庫県立コウノトリの郷公園開園20周年記念

げんきくん物語

海をわたったコウノトリの大冒険

読書感想文コンクール受賞作品



小学生の部

兵庫県知事賞

「げんきくん物語」を読んで

豊岡市立神美小学校三年 吉沢 壮生

ぼくは、コウノトリのげんきくんの冒険旅行が始まった時は、どんな楽しい事や、わくわくする事が起きるのかと思っ
ていました。

しかし現実では、げんきくん自身が、落ち着いてくらせる場所がなかなか見つけれず、一万二千キロメートルも、あちらこちらを飛び回っていた事、生きていくための大変な旅なんだと読んで、応援したくなりました。

島根県の雲南市で、ななちゃんというメスのコウノトリに出会ったのは、げんきくんが頑張り続けたからこそ神様からのごほうびだと思いました。

そんな運命の出会いのななちゃんが、サギと間違われて、あやまつてうたれて死んでしまった事は本当にショックな事件だったし、残されたななちゃんとの間に産まれた四羽のヒナ達を、オスのげんきくんだけではたして育てられるのが、特に心配でした。

ななちゃんが鉄砲でうたれた事実を知らないげんきくんは、帰ってこないななちゃんの分まで、必死にエサを運んでいきましたが、げんきくんにかかわっている人たちは、ついにヒナ達をきゆうごする事にしました。ぼくは、その話を知ってほんとに悲しかったです。げんきくんもきつとつかれていたの、ほんとに悲しいです。

コウノトリは、一人立ちするまで、タマゴからかえっても、へびやもうきん類におそわれたり、たくさんきけん目に合うと聞きました。

自然界なら、ヒナ達四羽無事にすだつていないかもしれませんが、

げんきくんはヒナ達のために本当によくがんばったなあと思っています。それだけに、ななちゃんの出会いは運命の出会いだと思つと、こんなお別れのしかたは、本当に悲しいです。

その後、げんきくんは、ポンス二というメスに出会つて、二羽の間にヒナ達もたん生し、ななちゃんとの間のヒナ達が成長してから再会するつと、うれしい出来事もありました。

げんきくんの冒険は、決して悲しい事ばかりではなくて、げんきくんががんばつてのりこえたからこそ、最後には、幸せがやつて来たと思つます。

ぼくは、この本を読んで、自然界の生き物が人間とちがつて、明日生きれるかどうかのきびしい毎日をすごしている事つと、人間の行いで命をうばう事つと、その命を助ける事つとできると知りました。

げんきくんが、どうして落ち着いて住める場所をなかなか決めれなかつたのか、ななちゃんのような悲しい事件がもう二度と起きないように、ぼくたち人間ひとりひとりが、生き物や食べ物にかんしやする事つと、もつときようみを持つて、自然をよごさないように気をつける事が大切だと思つようになります。

兵庫県教育長賞

「わすれないよ、げんきくん」

長野日本大学小学校三年 岡西 優真

ぼくは、鳥がすき。げんきくん物語の表紙の写真がすごくかっこいいなと思つた。コウノトリが全長一メートル、体重五キログラム、つばさを広げると二メートルで、足が赤色、声を出して鳴かないなんてはじめて知つた。

さいしよに、げんきくんが生まれて、外国に行つて、三羽の子どもたちと会うまでの話がすこいと思つた。ぼくは、外国の人を目の前にするつとかたまつてしまつてしまつけれど、げんきくんは、すぐに友だちになつてしまつ。ななちゃんがサギとまちがえられて、ころされたとき、目の前でこどもたちをつれいかれたとき、かなしかつたと思つ。一人で子どもを育てるのは、大変だつたね。公園のみなさんがヒナを育ててかえしてくれてよかつたね。今、みんなでなかよくくらしているかな。げんちゃんが、ゴムをのみこんでなくなつたときは、ぼくもかなしかつたよ。ぼくのかつているネコも、ビニールをのみこんでくるときがあるので気をつけるね。

次に、船こしさんがコスチュームを着て、ヒナがえさを食べるようにした話がすこいと思つた。ぼくは、船こしさんのことをどんどん知りたくなつた。「船こしさんは、つぎにどんなことを考え出すのかな。」公園ではたらく人々は、優しくつと強い人、そしてアイディアマンだと思つ。鳥のべん強をして、「こうすればいい。」つと、言える人だ。ぼくもべん強をして、船こしさんたちのように男らしくつとだれかのためにがんばれる人になつたい。

さいしよに、豊岡市の町づくりにびつくりした。今、コウノトリを見ることができるのは豊岡市つと公園の人々の力だ。ぼくは長野市に住んでいる。上田市の水田に八月一日から三日つづけて「ひかり」と「しろ」という姉妹が来たつと新聞で読んだ。つともうれしくなつた。ぼくの家の前の川には、立ち入りきん止のかん板がある。ときどき市の人が来て草とりやゴミひろいをしてる。カモの親子が水あびをしている所を見ると、つともうれしい。近所の鳥ずきのおじさんは、「このころ、鳥がいんだよなあ。」

つと、言つている。温だん化のせいと思つて調べてみると、コウノトリは人間よりも高い温度にたえられ、遠くまでとんで、くらしやすい場所に住めるらしい。このままでは、日本で鳥

を見れなくなる。鳥が川や田んぼにえさをとりにきてくれるように、みんなでせんとを守りたい。そして、ぼくもごみをべらしたり、水や電気を使いすぎないようにしたりして、小さなことをつみ重ねていきたい。

この本を読んで、コウノトリを空にかえすためにきょう力した人たちのように、どんなこともあきらめないでがんばろうと思った。ぼくは、この本を読んで本当に良かった。そして、いつか長野市でコウノトリに会えたらさいこう！

兵庫県立コウノトリの郷公園長賞

「げんきくん物語」を読んで

豊岡市立日高小学校四年 井垣 華菜

「コウノトリ」を知っていますか。見たことはありませんか。豊岡市に住んでいるわたしには、身近なコウノトリですが、一度も見たことがない人もいることでしょう。この本は、そんなみなさんに読んでほしいと思う、わたしからのおすすめの1冊です。

現在、コウノトリを身近に感じている豊岡市でも、ずっとコウノトリと共にくらべていたわけではありません。明治時代に入ると、鉄砲の登場により不幸な時代がおとずれました。コウノトリは、次々とたれてしまったのです。さらに、農業をする人にとって便利な農薬が登場したり、松などの大木も切り落とされたりして、コウノトリにとってくらしにくい時代がきました。その中で、最後の1羽として残ったのが、豊岡市のコウノトリだったのです。そして、ここから、コウノトリとくらす「共生」の本格的なとりくみのスタートです。長い長い取り組みに多くの人たちの願いが重なっていききました。主人公のげんきくんは、二〇一四年、福井県越前市の施設で生まれました。豊岡市と福井県越前市が協力して、授かった命です。げんきくん誕生はお互いの市のおかげ橋となりました。げんきくんが「コツコツ」と卵を割り進んだときのようすは、読んでいるわたしもそこにいるかのようになり、胸がどきどきしました。五十年ぶりとなるコウノトリの誕生ですから、それはもう、うれしかっただろうと想像できます。関係者の人ばかりでなく、みんなが幸せな気持ちになったと思います。やはりコウノトリは幸せを運ぶ鳥だと

思いました。

そんな幸せを運ぶコウノトリのななちゃん、サギと間違えられて鉄砲でうたれてしまったと知らされたとき、とても悲しくなりました。「なぜ、こんなことがおこるのだろう。人間が、コウノトリのくらしをこわしている。」と、胸が苦しくなりました。それに、げんきくんは、一人でひなを育てることができののだろうか、心がざわざわしました。コウノトリの郷公園の方々が助けに行かれたときは、ほっとしました。一羽ずつヒナを回収されていた写真を見ながら、よかったです。ありがとう。」と、さけんでいました。ヒナがびっくりにしないようにと、電車を止めて対応してくださったこと、待機してくださった獣医さん。多くの人たちが手を差し伸べてくださったことは、本当に良かったと思いました。そして次は、わたしが行動しなければならぬと思いました。コウノトリがくらす豊かな環境、それはわたしたちにとってもくらしやすい社会です。私に何ができるのかと考えたとき、人とコウノトリが共に安全にくらせる環境をつくるための勉強をすることだと思いました。まだわたしには大きなことはできませんが、コウノトリの郷公園に行つて学習し、環境について考えていこうと思います。まずは、コウノトリのことを知つてもらおう活動をしたいと思えます。この本に出あえたことは、わたしの「夢」のはじまりとなりました。必ず、人とコウノトリが共にくらす世界をつくっていきます。必ず……。

審査員特別賞

「げんきくん物語」を読んで

丹波市立東小学校五年 泉 拓希

ぼくの弟は、生き物がとても好きで、よく川に生き物をつかまえて行きます。ぼくの家の近くの川では、凶鑑についでいるようなたくさんの生き物をつかまえることはできません。ですが、豊岡市に住んでいる親戚の所ではたくさんの生き物がとれます。ぼくは、「なぜだろう。」

不思議に思っていました。この本を読んで、その理由がわかったような気がしました。

この本は、コウノトリの野生復帰の取り組みと、コウノトリのげんきくんの波乱万丈な半生について書かれています。コウノトリは、日本で一度絶滅した鳥で、豊岡市にあるコウノトリの郷公園を中心に野生復帰に取り組んできました。その活動とは、まずコウノトリの数を増やすために卵をうませて増やし、そのコウノトリを放鳥すること。そして、コウノトリが住みやすいように無農薬、減農薬の農作物作りや、エサとなる生き物がたくさん住む環境を作ることです。ぼくは謎が解けました。コウノトリが十分なエサをとれるように田んぼや川にたくさんの生き物を生息させる努力をしている、だからぼくたちは豊岡の川でたくさんの生き物に出会えるのです。

また、げんきくんの波乱万丈な半生について読み、コウノトリに関わる人は皆心の底からコウノトリのことを大切に思い、行動しているんだと感じました。げんきくんは、福井県で多くの人の熱意と努力でうまれてきました。順調に育ったげんきくんは、多くの人の夢と希望を乗せて放鳥され、日本中を旅します。そして、島根県雲南市が気に入って、そこでななちゃん結婚し、ヒナが誕生します。しかしそこで事件が起きました。ななちゃんがサギとまちがわられてうたれて死んでしまうのです。ぼくは心臓がバクバクしました。

「げんきくんはどうなるんだろう……。」げんきくんは一人でも子育てを続けていましたが、ひなを守るために救護することになりました。げんきくんは一人ぼっちになつてかわいそうだと思つたけど、げんきくんとヒナを絶対を守るという皆の気持ちが伝わってきました。また、救護する時にはヒナをしげきしないように電車を運休してバスで代行していました。ヒナをまた野生に帰すために、コスチューム飼育をし、人になつかないように工夫して大切に育てられ、雲南市の空に飛び立ちます。

げんきくんやヒナなどコウノトリのことを大切に考えて行動することは、思いやりにつながっていると思います。コウノトリがくらししているような場所では人と人、人と生き物がお互いを思いやつて、助け合つて生きています。だから、自然が豊かだと、そこにくらす人の心も豊かになるのではないのでしょうか。ぼくが住んでいる地域もコウノトリが飛んできて、住み続けられるような安全で豊かな環境になつてほしいです。そして、ぼくも思いやりを持った心豊かな人になりたいです。

選評

作家・兵庫県教育委員
審査委員長 玉岡 かおる



「みんなの思いをつばさに乗せて」

いやー、驚いた。寄せられた103作品、どれも力作。どれも巧い。

私も小学生の頃は作文が大の得意だったけど、こんなに巧く書けたっけ。

読書感想文は、まずは本を読まないといけない作文だから、読む、という作業の前でお手上げになる子もいる。おもしろい本ならすぐに読んでしまえるのにな。

その点、「げんきくん物語」は、動物が好きという子なら難なくのめりこめただろう。なにしろ実際にいるコウノトリが主人公の、事実を書いたおはなしなのだから。

男子の応募が多かったのも、そのせいかもしれない。私もそうだったけれど、女子は空想の世界でおりなす物語を好む傾向にあるらしいから。

それでも、コウノトリが国境を越えて大空を飛び、数々の苦難に打ち勝っていくこの本は、あらずしを追うだけでも、きつとドキドキ、たくさん書きたくなることだろう。

さらに、巧い作文というのは、ちゃんと「自分の目」が入っていることが大切だ。物語の中のできごとを、自分はどう見て、そしてどう感じたか。そこが優劣の分かれ目になる。

その意味で、今回選ばれた4作品は、ちゃんと「自分の目」が光っていた。

みんな、母鳥のななちゃんが間違つて撃たれて死んだ時のこと、シヨックだったね。そして一人ぼっちになつたげんきくんを思つて心を痛めたね。その純粹さには、読んでいるこちらの胸がつかくなった。

最優秀賞の吉沢壮生君の「げんきくん物語を読んで」は、そんなみんなの思いを代表するようにその悲しみを書いてくれた。次点の岡西優真君は、げんきくんと同じ目線で、話しかけるように綴つたのには唸らされた。三位の井垣華菜さんは、コウノトリを身近に見ている豊岡の子供としての目線が活きた。

審査員特別賞となつた泉拓希君も、真剣にコウノトリに寄り添つて書いた文章に心を動かされた。みんな、すばらしい作文だった。

このコンクールは便宜上、小学校の部と中学校の部とを分けてあるが、一緒にしてもすぐれたレベルの出来ばえだった。どうかこの感慨をさぐる「目」をいつまでも大切に、コウノトリを見守つてほしい。



選評

絵本・児童文学作家
審査委員 キム・ファン



わたしはたくさんさんのコウノトリの本を書いてきました。ですので、どのような感想文が届くのだろうか？興味がありました。みなさんが、コウノトリと共に暮らすにはどうすればいいのかを真剣に考えてくれていることがわかり、とてもうれしくなりました。感想文の多くが、ななちゃんがサギとまちがえられて撃たれたこと、げんちゃんが発泡ゴムを食べて死んだことなどの例をあげながら、コウノトリについて本で知ったこ

とや、これから自分たちがどのようにすればいいのか、しっかりと書かれていました。そこで小学生の部は、どれだけ自分の考えを自分自身の言葉で深められているのか、というところに注目して審査を行いました。

県知事賞に輝いた吉沢君の作品は、「げんきくんが、どうして落ち着いて住める場所をなかなか決められなかったのか」と疑問を投げかけながら、コウノトリが暮らしていける場所とはどのような場所か？自分の考えを深めていました。県教育長賞を受賞した岡西君の作品は、「鳥が川や田んぼにえさをとりにきてくれるように、みんなでしぜんをまもりたい」と、いつか自分の町でもコウノトリと会えるようにしたいという強い思いが伝わりました。郷公園長賞の井垣さんの作品は、「コウノトリが暮らせる豊かな環境は、わたしたちにとつてもくらしやすい社会」だと訴えました。審査員特別賞の泉君の作品は、豊岡に生きものが多くいことに「なぜだろう」と疑問を持ち、「自然が豊かだと、そこにくらす人の心も豊かだ」と導きました。そうです。コウノトリと共に暮らすためには、豊かな自然と、人間の豊かな心が必要なのです。特に受賞者のみなさんは、そのことをほかの作品よりもより深く、自分自身の言葉で書かれていました。受賞者のみなさん、おめでとうございます！

